

## 年間第三十二主日

2010.11.7 高円寺教会

### ルカ 20 : 27～38

今日の福音は、ユダヤ教の中で復活を否定するサドカイ派とイエスとの論争の場面です。「レビラト婚」という、先祖から受け継いだ財産を守るための決まりごとを持ち出して、サドカイ派はイエスに復活はないと主張します。けれども、イエスは、死後の世界は、この世とは全く異なるので、そのような質問はばかげていると相手にしていません。イエスの関心は、死者ではなく、生きているあなたが神の国に入れるかどうか、私からの回心への呼びかけに応えるかどうかに向いています。

さて、今日は、死者のためのミサですので、福音とは少し外れるかもしれませんが死者についてお話しすることにします。

キリスト教が死者のために祈り始めたのは、教会が誕生して間もない2世紀の終わりからで、お墓のそばでミサをしていたことが確かめられています。4世紀の有名な聖人アウグスティヌスの母モニカは、亡くなる前に「自分のことを記念するように願った」という記録もあります。

死者のための祈りは、亡くなった多くの人が、煉獄と言いますが、天国に入る前に罪の浄めの苦しいプロセスを経なければいけなかったのもので、生きている人がそのプロセスが少しでも楽になれるように助けるためのものでした。ミサを神父さんに依頼したり、施しをしたり、償いの業に励んだり、必死で死んでいる人の魂の浄めのために生者は努力していました。市ヶ谷にあります通称援助修道会は、もともとは煉獄援助修道会といって、死者が浄められてキリストの復活に与えるようにと祈ることを使徒的活動の一つにしています。

私は、「死者のミサ」を捧げるにあたって二つのことが大事だと考えました。一点目は、亡くなられた方と生きている方に、傷やしこりがまだ残っているケースに関してです。亡くなられた方と和解がうまれない、傷が癒されずに残っている。死ぬ前に一言言いたかった、あるいは話して欲しかった、という思いを残している方もいらっしゃるでしょう。そのような関係が続いている方に、わたしが簡単に申し上げることはできません。ただ、今日の福音にもありましたように、死後は新たな関係に入っていきます。故人との間柄も、この世とは違う、執着や囚われから解放された関係に変わっていきます。イエスの十字架上での傷も、体だけでなく心にも痛みが伴ったはずで、だから、イエスの葛藤や苦しさは、今、傷で苦しんでいる方を包みこむことができるはずで、イエスは、ご自分と同じ傷を持つ方に深い同情を示し、その人を近くに呼び寄せているはずで、イエスは、傷を負いながらも弟子たちとの新しい関係に入りました。イエスの傷跡と同じように、わたしたちの傷跡からも少しずつ、ゆるし、和解、希望の光がさして来るように辛抱強く願いましょう。

もう一つは、亡くなられた方とよき絆についてです。私たちは、故人から何かを受け続けていると思います。少し特殊な例かもしれませんが、私が高校時代にお世話になった先生の死について分かち合います。その先生は、高校3年の時の担任で古文の先生でした。朴訥、実直な先生で、見てないようで生徒のことをよく気にかけてくれる先生でした。わたしが、現役で大学に合格できなくなったことを報告に伺った際にも、「来年志望校に合格できるように頑張ろう！」と励ましてくださいました。ところが、その年の8月に先生は急死されてしまいました。先生は夏休みに実家の浜松に帰省中、台風が近づく海辺を散歩していたら、先生は2人の少年がおぼれているを見つけました。そして、危険を顧みずに海に飛び込んだのです。先生は、高校時代に遠泳の選手だったこともあり、少年2人は救出できましたが、先生ご自身は波にさらわれ、力尽きて亡くなられてしまいました。わたしは、二つの意味で大変なショックを受けました。一つは、来年こそ先生に喜んでもらいたいという願いがかなわなくなってしまったこと。もう一つは、ご葬儀で先生の奥様と小学1・3・5年の男の子が遺族として残されてしまったことです。隣人愛を実践した素晴らしさと、残されたご家族の大変さと悲しみを目の当たりにしました。その先生もご家族もクリスチャンではなかったし、当時の私もまだ教会に通ってはいませんでした。けれども、「人生って何だろう？」と考えるようになりました。先生の死は、私の神父の召し出しに直接影響はなかったかもしれませんが、人を助ける勇気がどのようなものか、また、助けたことでの代償がどのようなものか、考えさせてくれました。先生の死にざまは、日頃意識していても、心の奥深いところに宿っていて、時々私に「見せかけだけの生き方ではなくて、本物の生き方をしてはどうだ？」「もったいぶらない、出し惜しみしない、人に捧げつくす生き方をしたらどうだ？」とささやいてくれたように感じます。亡くなられた方が今も生きているというのは、このような関わりを言うのかもしれませんが。死なない命が、生きているわたしたちを何かの折に励ましたり、生きる方向を示してくれる。そのような絆を誰しも持っていて、それが何なのか思い起こし大切にするためにこのミサに与っているのかもしれませんが。

今も放たれる死者からの応援のメッセージを私たちがくみ取れるように、このミサを通して願いましょう。

イエズス会司祭 柴田 潔